
テイルズオブサイレンス

敬愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブサイレンス

【NZコード】

N1673M

【作者名】

敬愛

【あらすじ】

基本的に俺と健人君と静香ちゃんの物語。

普段全く外に出ない僕が頭をひねりにひねつて書く初めての小説ぽい小説。

純文学のつもりだったが異世界とか勇者とかオリ主とかテンプレとかチートとか

ようわからんが人気な作品に影響を受け真似してみる。

用語解説（前書き）

隨時更新。

名前の由来はだいたい僕の浅はかな知識と貧困なボキャブラリーによる。

用語解説

「ジルバ」シドの居る国。 「マルク」譲、静香の降り立つた国

「バトルチェンジ」上位属性にランクアップする事
ソードマスター・アーチャー・ウォーリア・セイント・アサシン
など。

下位属性は順に剣士・弓使い・斧使い・ケアマネージャー・くない
使い。

「ヒルクス」かつてマルクとジルバを繋いでいたという光の道

「世界の形」ワズ・ダ・シユリビオンと呼ばれている。ヘブラ・
エルサム語で譲達の現実世界ではB・C・5000くらいに誕生し
たとワイン・アホヤネが提唱した。ワインはサヴァン症候群で両親
以外とは接觸した事が無いので真の名前を知っているのはシドくら
いである。他の者はそんな事知らなくても生きていけると思つてい
る。

四神獸が周りを囲む四角い平面の大地。角にはエリシュオン・ジパ
ング・シャングリラ・ヘブンがあると言つ。四神獸がそれぞれ守護
している。

「キュア・破魔調律・ケアマネジメント」

セイントになるために必要な資質。譲はキュアは最初から使えた。
今後セイントのモ里斯とジョージに破魔調律を教わることになる。
主に僧侶系の冷系魔法、炎系魔法が使えるが弱い。結界等の拘束術
の方が強力である。ケアマネジメントはモ里斯から貰つた百年エメ
ラルドを媒体として初実戦で成功させた。

いなくなつた健人

今頃あいつ何してるかな。死んでいないだろうな?

そいつは三年前忽然と消えた。

卒業式の日、そいつの彼女は動搖していた。

「健人、何処行っちゃったの?」

朝方メールが来ていたらしい。「ヤバイ。俺もうダメだ。」

帰り道、健人の家にその彼女、静香と寄つてみると

鍵はかかっておらず部屋はもぬけの殻だった。

楽しい事ばかり喰つて生きていける若い頃。

この部屋で静香の作つた鍋を食べたり、お泊り会を

したり。思い出が沢山詰まつた部屋が今は、カーテン

の無いマンション7階の口当たりの良い窓から、春の

絹ごしされた清涼な光が差し込んで埃を照らしていた。

静香は今でも健人を待つていて。看護士を手招いて。

俺と同じ大学に通いながら。

俺はといふと大学に通いながらロックバンドをやつている。

CDを出すと一千枚くらい売れる。インディーズ界ではそこそこ有名だ。ライブでも箱に千人入る。

将来有望かもしない。「Rising」という事務所に所属している。

バンド名は「Silence」

ロックには合わない名前だが、静香の名前から取った物だ。

彼女も気付いて結構喜んでいる。頑張つてねと。

大学では社会福祉を専攻している。将来は福祉・医療の現場で頑張りうと二人で昔約束した。健人と静香もこの大学に合格して三人で頑張りうとした矢先、あいつはいなくなつた。

「両親も捜索願いを出しているが」の三年間これといった情報はない。全く神隠しでもあるまいに。でもどこかで元気でやつてるはずだと俺は楽観視している。やうしなければ静香がマイツてしまつから。

俺は両親を早くに亡くした。火事だ。両親は一階で寝ていた。

俺は一階で父のタバコにライターで火を付け、ビックリして近くにあつた灯油で火を消そうと思って。それで・・・燃えた。全部。

5歳の時。逃げるのが精一杯だった。119も知らなかつた。

火災保険と両親の生命保険2千万が下りて来て祖父母に預けられて育つた。

もちろんどちらの家も俺を良くは見ていなかつた。しかし1日1千円は必ずくれた。どういうわけかどちらの家でも1日1千円貰えた。

食事が白米しか出でこない事があつたので、ふりかけや卵を買った。

それを良く覚えている。静香や健人と出会つたのもこの頃だ。

カレーへのこだわり

ここは大学内の食堂。学生食堂という響きとは縁遠い

全面ガラス張りのお洒落な空間。

静香と食事をしている。俺はカレーが好きだ。静香の得意料理だから。

静香は実にその空間にマッチしていて、一見恋人同士に見えるかもしれない。

いやしかしただの幼馴染だ。それが実態だ。それ以上でもそれ以下でもない。

健人が失踪してから食欲を無くし気味の静香は大好きなカルボナーラを頼む時でも

いつも半分残す。俺はカレーには卵とソースをかけて食べるのが好きなのだが、

静香がカルボナーラを頼む時には残り物を頂いて、カレーに混ぜて食う。

最初は嫌がってた静香も、最近はもつたといいからいいよとしてくれる。

まあ間接キスくらいしても健人も怒らないだろう。子供じゃあるまい。

「俺もう二十一だぜ。」

つこいつかり独り言を言つたら静香は怪訝そうな顔で「ひらを見てくれる。

今日はカルボナーラではなくマニバジルピザを食つてるので、じやあ遠慮

なく卵を割り落とし、片隅にあつたソースに手を伸ばすと「ちょっと譲」と

がつしり右手を掴まれた。そつそつ静香の前ではカレーにソースをかけない

約束だつたんだ。一人で食つときはいいんだが。

昔、静香が俺の為に珍しく得意のカレーを作ってくれたとき、健人は「ールストローム

サラダを食つていた。ベジタリアンだったんだ。あいつは、肉屋を嘗んでる

両親が豚や牛を切り分けるのを見て、残酷だ。何故人間は生命を奪わなきや

生きていいない？同じ命なのに。と子供心にも相当悩んだよつである日突然

父ちゃん、母ちゃん、俺肉食ねえからと言つ出した、らしい。

大人になるとそれが高じて魚も食わなくなつたらしい。話が横道に逸れた。

カレーを作つてくれたとき、俺はソースと醤油を間違つてかけてしまい全部

残してしまつたのだった。醤油派の気持ちはわからなかつた。今でもカレーには

ソース、名前は譲だがこれは譲れない。それで怒つた静香が一度と私の前では

カレーにソースはかけないで、絶対。と無理矢理約束させられてしまつたのだった。

食い物の恨みは怖い。

大学の講堂、いつ入っても息苦しい。基本人がたくさんいる所は苦手だ。

教授様は今日もノーマライゼーションの重要性を説いている。

そりや健常者にも障害者にも等しく人権といつ物がある。

最初ミケルセンが初めて用い、ニルジエが生活サイクルにこれを導入した。

それは高校の時から知っている。

ではこの講堂での授業はノーマライゼーションの原則にのっとっているだらうか？

小学生、中学生、高校生までは個別の机なのに、大学生になると途端に大人扱いだ。

俺は犯罪者にはならないぞ。ははは、親殺しが何言つてやがるという声が聞こえた

ような気がした。15年前の話だ。時効さ。すまない父さん、母さん。

俺はやつぱり少し捻くれて育つちまた。

教授様のポジションは奪えそうもない。肥溜めにぶちこまれてそれ

に溶けて行く。

今の俺にはそれしか出来ない。

カリカリ、カリカリ。隣の静香は熱心にルーズリーフに教授の言っている事を

書き込んでいく。仕方ない見習つかと思うが、この牛舎の中の牛みたいな環境

では飼い主の手でも舐めてやりたいところだ。その代わりと云つてはなんだが

居眠りで涎を垂らす事としよう。講義はまだ始まつたばかり。俺は財布の中に

入れてあるハルシオンを誰にも見られないうに一錠飲む。

あの一件、健人の件。俺は人のいる場所では眠れない。自分の部屋でも眠れない

といふのに。丸三日間寝なかつた事がある。流石に精神科に行って眠れませんと

言つと、CTスキャンと脳波を取られ異常は無いよつだから睡眠導入剤処方しどくな、

と軽々ハルシオンが手に入る様になつた。小さいクリニックはすぐ薬を出してくれる

から助かる。ヤブでも何でも良いんだ。ただ俺は昔から悪夢を良く見るから眠るのが

怖くておクスリが必要なんだ。すぐ眠くなつた。九十分経つて「讓終わったよ。」

その声を聞く寸前に丁度目覚めた。「後でノートパソコンしておいてくれ。」

ショウがないなあという顔付きで図書室に静香は向かつた。

ちょっととフラフラするが頭がすつきりした。ハルシオンの半減期は何分だったか。

まあいいや。ついでにコーヒーでも飲むか。

俺はブラックコーヒーが大の苦手で、ミルクと砂糖入りの茶色くて長いコーヒー

しか飲めない。静香からはお子ちゃま扱いだ。ガキの頃から味覚が全く成長していない。

味蕾が少ないんだる。きっと。家政学の授業でそういう事を習つたような気がする。

今は一人暮らしだから、家政学の講義は積極的に受けていきたい。
クックパッドも

便利だがレシピ多すぎ。でも料理は実践に限る。男の料理なら尚更。

ホスピス

俺はおじこひちゃん、おばあちゃんが好きだ。例え呆けていたって、おむつが

必要だつて、寝たきりだつて。手に刻まれた皺。それが私達にここまで生きてきました、

とこつ離りしげな勲章のように見えるのだ。

面倒を見てくれていた父方、母方の祖父母も両家とも祖父が亡くな
りおばあちゃんだけ

だ。ぴんぴんしている。ああ、ありがたいなと思つ。最近は打つて
変わったように両家

のおばあちゃんは優しい。社会福祉士を取つたら介護福祉士も取つ
て身の回りの世話を

してあげられたならなんて思つ。まがりなりにも両親を事故で死な
せてしまつた俺を

育てくれたおばあちゃん達に恩返しがしたい。そんな心境になつ
たのにはある理由が

ある。母の父はガンで死んだ。金はあつたからホスピスに入れた。

毎日モルヒネを打つ

ていたが最期は意識は混濁し、植物人間みたいなものだった。安ら

かな死、やつ言って

良いのだろうか。

ドラマ白い巨塔で財前五郎が肺がんで死ぬ間際、呼吸困難に陥り送管しようとした時

その妻は喋れなくなるなら送管等しなくても良いと言った。里見脩一に宛てた手紙、そ

れはまさに神の手を持つ外科医のガン患者に対する処置のバイブルだった。

ドラマ東京タワー　おかんと僕と日々おとんでは、おかんは最期抗がん剤治療があまり

にも苦しへ息子にもう治療を諦める事を宣言する。それから明るく余生を過ごした。

そういうのを見ると果たして安楽死ねる事は本当にその人にとって幸せなのか

等とがらにもなく考えてしまつ。

J・POPとクラシック

死と言えば図書館でキュー・ブラー・ロス女史の「死の瞬間」を読んだ事があるが

せつぱり内容は理解できなかつたな。本もタイトルで惹かれて買つとどきすべり

する事がある。その点じでなんかは偉大なんじゃないかな。可愛い女の子やむさ苦しい

イケメンのジャケの中になんとも言えない不思議な感覚にとらわれるジャケットといつ

のがある。相対性理論とか東京事変なんかは遊び心に溢れていよいよな。思わず買つ

ちやう。

最近はデジタル化が進んでCDもせつぱり売れないうが固定ファンがついている

アーティストはやっぱ強い。シースルーの衣装で巻き起しせ嵐、嵐、

なんて歌つてた嵐も今では五十万枚はまづ越えてくる。ジャニ系の中でも今や最強。

J・POPも飽きたから最近は着つたダウンロードでホントに厳選

した曲しか聴かない

けど。ロッカーなのにクラシックは良く聞くね。モーツアルトとか
バツハ、ベートヴェ

ンはもちろん、ラフマニノフとかビゼーとかも。静香は専ら洋楽、
バックストリートボ

ーイズとかが好きなのかな。

スピードワーニングとかDRIPPYじゃないけど洋楽聴いてると
自然に英語が聞き取

れる様になるとは静香は言つてた。話すのは難しいらしいが。まあ
俺達が目指す仕事に

英語はそれ程必要じやない。カタカナ読めれば大丈夫だ。トメだの
ハツだのお婆ちゃん

はカタカナの名前が多いから。でも明治生まれはほとんど死んでる
からそういう傾向

も段々少なくなってきたてはいる。

変わった出会い系の使い方

俺はメールはあまり好きじゃない。絵文字とかは確かにカワイイ。だが文面だけだと

どうしても誤解が生じ易くなるから必然的に短くなる。それが何回も来るのがウザイ。

メールが好きだった頃もあった。出会い系サイトが無料を謳い出すその前の時代だ。

写真だけを見て妄想を膨らまし会って止する。単純だなあと思つていた。ポイント制

で一回メールを送るのに五百円かかる。写メを見たければ二千円だ。ホントに短い自己紹介文

介文で「今暇なの。」とか「誰か夜の相手してくれない。」とか喰い付くと思つだろ。

俺はそういう男じゃない。俺が狙っていたのは13歳から15歳くらいの女の子だ。

口コロンじゃないぞ。

「両親が離婚したんです。誰か話し相手が欲しいんです。」とか「周りの友達は皆Hして

ます。私処女捨てたいんです。」とかいう自己紹介だ。

実際会つて説教してやるひつと思つてた。16歳くらいの時だつたかな？。ケータイを二個

使ってそういう子にコントクト取る為に大人ぶる必要があつた。高速で、いいよ、話し

相手になつてあげる、大人の世界はね、だの、俺なら優しくリード出来るよ。だから会

わないかとか。

下心全く無いわけじゃない。で会える事になつた女の子が一人いた。クリスマスイブの

日に。そうしてクリスマス・イブの日に説教するのもムードがないなと思いつつ、出か

ける身支度をしているところなメールが来た。「当サイトを」と利用いただき誠にありがと

ういぢやいます。お知らせがあります。初回登録料二十万円が未払いとなつております。

御入金をお早目にお願ひします。なおポイントは全精算され、お客様は退会扱いとなり

ます。」

は？誰が払うかそんなもんつて速攻で返信しようとしたら、宛て

先が見つかりません、

だって。クリスマスの日、俺はそのサイトのお問い合わせシステムを利用し、「おい、こ

らお前らの会社クリスマス休みか。ふざけるな。担当者だせよ。ぶち殺すぞ。」って書い

て送つたら大晦日の日、お客様はブラックリスト会員になられました、ってなられました、ってなられました

たつて偉いのかよ、それ。っていう笑い話。

それもメール嫌いの一因。でも携帯ない頃つて家電で健人とたわいもない話を四時間も

五時間もしたものだけどな。今は携帯は一台しか持つてない。静香とバンドのメンバー

くらいとしかTELしないから。携帯電話の普及は世界を確実に変えたね。昔取った杵

柄で携帯には少しうるさい。

歳を取るといつ事

「ねえねえスマートクローズ超面白いよね。」珍しく静香が授業中に話しかけてくる。

スマートクローズといつのは映画で今から千年後の未来、復活した伝説のヤンキ - が

PCウイルスを作り上げた東大卒の天才と、格闘ゲームで勝負をして（今のW.i.e見たい

なの。もうその頃には人型アンドロイドが出来ていてプログラム次第で強さは自由自在

負けるのだが、必死にコンピュータの勉強をし、ならばこちりもとウイルスを発明しち

やつでお互いにアンドロイドをハッキングし合つといつ設定の良くわからぬいSFアクシ

ヨン3D映画で、静香のお気に入りのシーンは最後その伝説のヤンキ - が惜敗した後、

そのお婆ちゃん百歳が出てきて、わたしや年期が違つんだよとばかりにNASAやペン

タゴン、JHAのコンピューターを次々ハッキングし、ガンダムみたいな秘密口ボット

を遠隔操作し、東大卒のアンドロイドをめりあわせに破壊し、
アメリカの核ミサ

イル誤射を止めるところシーン。

「凄いよね。百歳だよ。誕生日回迎えかけってるんだよ。それが
コンピューターって……。」

痛快だし、未来のお年寄りのビジュンみたいで良くない?」

「まあそうだね。」

百歳……。乐じやないよ。本心ではそつまつ。アルツハイマーや
脳梗塞後遺症で認知

症を発症したまだ七十にもならないお爺ちゃん、お婆ちゃんの地獄
絵図の」とき生活を

実習で見た事がある。大学を卒業したら専門学校へ行つて介護福祉
士も、両

方取らうと思つていた俺もさすがに心が折れた。

あれは人間の生活じゃない。人権剥ぎ取られている。運悪く未だに
身体拘束を行つてい

る施設をみたせいもあるが、朝と夜の顔。この違い経験したものし
かわからない。

朝は二ゴリゴしながらオムツを替えたり、体位交換を行つたり、食

事介護を行つたり、

それはそれは平和なものだ。

しかし、夜になると始まる徘徊。目的も無く歩き回り排泄物をトイレではない所にした

り、それを弄便したり、身体拘束されてる利用者さんはオムツの中に強制排泄。痰が絡

んでも吸引してもらえず、コップ、コップ。施設の職員は「いつそ死んでくれたら楽な

んだけど。」なんて笑つて言つ。気持ちもわからなくもない。夜それは地獄。

人間の本能がむくむくと首をもたげる無間地獄。若い頃は綺麗だつただろうに、

男前だつただろうに、一人では何も出来ないのだ。歌の話じゃない。確かに夢の中で

現実の行動を行つてしまつのだ。静香もそれを乗り越えてきて今、横で静かに笑つてい

る。ちょっとカワイイなと思った。俺馬鹿。健人が帰つてくるまでは必ずあいつの代わりを成し遂げる。そう心に誓つているんだ。

倉木麻衣とウタダ

今日は静香の買い物に付き合つ。季節は夏だ。蝉が鳴いている。工場で作業しているから

よくは聞こえないが。SUMMER SONGとSUMMER BREAKと

FEEL FINE!をリピートで聴いている。倉木麻衣は結構好きだ。一時期ウタダ

のパクリが現れたぞと話題になつたが、ショッパンから全然違う音楽性を志向している

のは確かだ。野次馬の類、ゴシップ、俺は大嫌いだ。人の足を引っ張つて金をもらう奴

生きてく為に仕方が無いんです。という顔はしていないだろう。面白おかしければそれ

で良いなんていう享楽的な奴は反吐が出るぜ。

何を買うかと言つと女性用水着だ。なんで?俺に見せてビツするの?静香は結構なスポーツ

ーツマン。ソフトボール部でエースで四番だ。

「譲りれど?」

めっひや 露出度の高いビキニ。鼻血出たつだ。冗談だら。冗談だつたらしく紺のスクー

ル水着みたいなのがお買い上げ。地味だな、と思つたが静香の性的嗜好からいつて妥当

だろ。

海水浴これ着てこくから。静香は言ひ。え？ 海水浴つて何？

大学の夏休み海に行いつよ。つて、えく全然聞いてない。

「昨日決めたんだもん。少し息抜きしないとね。」

俺がアワードア派じゃない事を知つていて言つているのか。

海なんてもう何年も行つてないぞ。真つ暗なライブハウスで

この世の果てを、ギラギラ尖がつた夜を演出している俺に海に行いつ

ところのか？

本気ですか？

「本気。」譲、音楽ばっかり聴いたり歌つたりしてゐるじょ。

たまに外で遊ぼうよ。うーんこれまでそんなお誘いてんでなかつたんだけどな。

どうこう風の吹き回しか。

「ショーケスピアは音楽を聴かない人間は信用するなって言つてたよ。」

「あの人暗いでしょ。友達じゃないけど。オセロだのリア王だのマクベスだの

後何だつけ」

「ハムレットだよ。」

「ああ、そうそう、それそれ。」

一番有名なのを忘れてる。この娘は時々天然ボケをかます。頭は良いのだが。

ライブの風景

N浜海水浴場で遊ぶ事に決まった。今度の日曜日。つてその日夜からライブの日だ。

近場だから朝早く出かけることにした。待ち合わせ時間は午前九時。だが過ぎても

静香は来ない。どうしたんだろう。いつもは時間に正確な奴なのに。

携帯に電話してみる。プルルルル。すぐに出た。

「あ、譲ゴメン。お父さんが交通事故起こしちゃって怪我したので、今病院だから

行けなくなっちゃった。切るね。ホントゴメンね。」

プチっ。

なんだよ、楽しみにしてたのに。病院だから電源切らないとダメなんだろうけど

よっぽど慌ててたんだろうな。静香のおじさん怪我か。大した事ないと良いんだが。

俺も運転下手くそだから気を付けないとな。

夜ライブハウス「ココノア」に俺はいた。地元では一番大きなライブハウスだ。

メンバーと田陣を組み「DON'T FEEBLE FEAR!」と手を重ねあつて掛け声を出す。

なんでこそこなかけ声に決まつたかといふとお姫さんガナイフを投げてくるからだ。

もちろん贋物だが。いつからこんなパフォーマンスが始まつたか知らないが、歌詞

の内容が社会規範にあまりに外れているので、客もお前ら死ねやみたいなノリなのか

も。俺達の曲は客の鬱憤晴らしには最適だという事だらう。しかし「ノー・クラック」

とこの曲になると静かになる。シャブ中だった女が歳をとつても薬を止めず、若い男

と行為に励んでくる時に中毒で死ぬという歌なのだが、俺が弾き語りでやる静かな曲

だ。

俺が今のメンバーと出会い前、路上で何度も何度もこの曲を歌つ

た。石を投げ付けら

れた事もあった。水をぶつ掛けられた事もあった。それでも俺はその曲のタイトル

の本当の意味に気づいてもらえるまで歌い続けた。この女は孤児で
母親代わりにな

つてくれる人間はいたが父親代わりになつてくれる人がいなかつた。
異性の親に愛

される事、愛されない事それがどれほどまでに重要かというメッセージ
ージを込めてい

た。そんな曲を熱心に聴いてくれたのが、今のメンバー三人だ。み
んな母親がいな

い。俺も含めて。健人にも静香にも見せられない俺の心の闇。それ
を話せるのがメ

ンバーだった。

バンドのメンバーと合コン

メンバー集めて合コン！静香には内緒。〇大学のミスキャンパスが来るらしい。

惇のツテだ。惇はドラム。肩口にサソリの刺青を入れているが実はシール。

来た来た。うーんハズレ2人。当たり2人だな。ミスキャンバスだと思われる

娘は薄水色のキャミソール。

近藤が早速話し掛ける。1番カワイイと思われる娘に。近藤はベイスだ。ねえねえ

君ミスキャンパスなんだって？

つてそんながついたら女の子引くだろ・・・。

「いえ、違いますよ。ミスキャンパスはあの娘です。」その娘は冷静に俺がハズレだ

と思っていた女の子を指さした。

「ああそなんだ。ふーん確かにカワイイね～。」近藤の目が腐つてゐるのか、俺の目

がおかしいのか・・・。ちなみに静香は一重で目が切れ長で鼻は

そんなに高くなく

唇がプリツとしてる。美人だと思つ。実際モテルし。審美眼は確かに筈だ。その娘は

巨乳だった。近藤は巨乳に巨乳が無い。顔も可愛く見えてしまつた。どう。

ところが博までが「やつぱりオーラが違つよね。」等と言つ出しだ。博はギター。

ロバートの山本博みたいに目立たないからあだ名。本名は伊集院元氣。フルネーム

で呼ばれる時、名前を呼ばれているのか、体調を尋ねられているのか戸惑つのが悩み。

ギターのくせに短髪で服のセンスもダサイ。

おこおこ、こつらみんな巨乳ファンかよ。ミスキャンパスの審査員も酷いよな。

俺がカワイイと思った娘は結構といつも相当大人しくまるで喋らない。

ミスキャンパスばかりちやほやされるので他の3人はつまらなさそうだ。

といわけそのおとなしい子が。

俺は案外モテる

ちなみに最近どんなゲームが流行っているのかさっぱりわからな
いので

ネズツチ謎掛けを始めようと思つた。が思いつかない。思いつくわ
け無いだろ。

あの人天才でしょ。見てて怖いよ。整えるの早すぎで。

「あ～もつ終電。」ミスキャンバスの女の子が言つた。ちなみにメ
ンバーは全員車

を持つていない。メルアドくらい聞いても良さそうな物だが全員失
敗したらしい。

俺はそんなに飲んでないが飲酒運転で捕まるのが嫌なので、運転は
出来ない。

他の三人は家が近いらしく、メンバーが送つてあげる事になつた。
最近物騒だから

あまり盛り上がりたくない合コンの後でも女の子だけで帰らせるわけ
にはいかない。

と思つ。ミスキャンバスの娘を俺が送らなくてはならないよつだ。

車は置いて、電車で帰ろつ。気になつていたおとなしめの女の子は
惇が送つていく事

になつたようだ。

終電だつた。車内はガラガラ。酔っ払いのサラリーマンと碇シンジをそのまま

大人にしたよんだこか人をイラライラさせる学生風の男だけだつた。

「ねえ、私酔っ払っちゃつたみたいですね。」

そう言つて巨乳を押し付けてくる。じつは事は結構今までにもあつた。

俺は実は結構モテルのだ。GLAYのTERUの昔の姿みたいなんて言われて、

EX-ZILEのTAKAHIROにも似てるといわれた事がある。
その2人に共通項が

あるか? と思うがどうもキル奴には違いない。バンドのメンバーの中でも

俺がモテルのをやつかんするのが特に惇。惇は見栄つ張りだからバンドの中で

ドラムという存在がいかに重要か。曲が終わる時ジャーンとラストを決めた時の

飛び散る汗のかッコ良さを主張してくる。等と冷静に考えていたら、もうプログラ

見えそうになつていた。白いブラウスが彼女の胸の大きさを強調している。寒がり

なのが半袖ではなく長袖を着ている。

「キスしてくれませんか？」

そう言われて頭がちょっとグワングワンとした。静香とはキスはした事はない。

他の娘もした事がない。つまり俺は実はファーストキスもまだなのだ。

が動搖はもうよそう。ごめん実は俺ゲイなんだ。言つた瞬間ドン引きするミスキヤン

バス。「じゃあどうして合コンなんか来るのー」「わかつたメンバーハーの誰かと出来てる

んでしょ」

汚物を見るような目で見られた・・・。俺はゲイでもレズでも差別しないけどこの娘

性格悪いな。「次の駅で降りますから。ちょいなら安牌さん。」

プシュー。爺さんのすかしつ屁見たいな音を立てるドアに向かって逃げるよつこ一目

散に駆け降りていった。

ふ〜顔の悪い娘は性格も悪い・・・事もあるさ。ちょっと巨乳の感覚の余韻に浸りな

がら俺も電車を降りた。

健人の居場所

俺は一日酔いはした事がない。丈夫な肝臓に産んでくれた両親に感謝。

静香にも昨日の合コンであつた事は気付かれてないよつだ。

図書室で一人で読書。俺は太宰治全集。静香は志賀直哉全集。生前

反目しあつていた二人。

「やつぱり太宰先生は良いよな。アイロニーの漂わせ方が他の作家とはくらべものに

ならない。」

「あら志賀直哉は小説の神様よ。文壇であれほど力をもつた方はいないわよ。」

「暗夜行路をくそみそに仰つてただろう。太宰先生は。実際あれは酔っ払いの愚痴み

たいな小説だよ。」

「如是我聞で志賀先生をこき下ろしてくれたわね。でも許してください

ったのよ。」

寛大な方だわ。」

「のままだとケンカになりそうだ。全集を読むのはよそう。

人間の体という小学生向けの図鑑みたいなのを見つけた。懐かしい。ペラペラペー
ジをめくる。静香が「あ、生殖器だつて。エロ~い。」

小学生か？君は。「あれ、でもペニスと膣の説明がないわね。子供
向けなのね。ホン

トに。」

外来語に日本語では合わないのではないかと思つたので静香に言つ
たら何よセクハ

ラ？言えないわよそんな卑猥な言葉。

たぶん彼女の頭の中では生殖器の様々な呼び方が走馬灯のように駆
け巡つてるだろ

う。完全なるセクハラだ。健人がいたら喜んで静香を苛めるな。俺
と一緒になつて・・・。

健人何してるだらうな？今頃。

「死を見つめる。死を見つめる。死を見つめる。死を見つめる。死
を見つめる。」

「これは白石系暴力団魔王会。」

朝の恒例の行事。みんな心臓の辺りに裸でドスを突きつけている。

その中で一際大きな声を出している男。

健人だつた。

第一部 完

嫌な予感

そんな事とは露知らず静香と俺は現場実習に入る四年生になつていた。ここでし

つかり成果を上げレポートを書かないと卒業できない。社会福祉士は主として相談

業務を将来的には行つ事が多い。静香が看護士の資格を取りたいと思つたのは大学

に入つてからで、一応社会福祉士も取る。その後首都医校みたいなところに入学し

て看護士の資格を取る。そういうプランらしい。静香もお年寄りは大好きでこれは

先述したエピソード等からもわかると思うがとにかく敬愛の心を強く持つてる。

両方持つていた方が有利なのだ。有利というかそういう個人的な打算的な考えでは

ないな・・・いかに患者さんの心に寄り添えるか。それには社会福祉の勉強も必

要だという事だ。

静香は学校帰り必ずある神社に寄る。譲は来ないでね。と言わされて

いるがビリヤ
り

健人の帰つてくるのを祈つてゐるらしい。

「終わったよ。待たせて、ゴメンネ。」

「何お願いしてゐるの？ 教えてよ。」あらかた知つてゐるのにあえて聞く意地悪な

俺。「秘密。」そう言って寂しそうに笑つた。俺も悲しくなつてじやあじやあわ

何個お願いしてゐるの？ そう聞いた。「うーんじやあ特別ね。えーと三つよ。」「

三つ？ 看護士になりたいと健人帰つてきて欲しい以外に何かあるのか？

両親の長生き？ 世界の平和？ 男友達がたくさん出来ますように？ 最後のは

ちょっとと考えづらいけど静香の三つ田のお願いといつのはわからなかつた。先程

とは違つて冷酷な目で薄く笑う、その目と唇に何か悪い予感がした。

「どうしたの譲。」

「いや今一瞬静香の後に黒い影が・・・」

俺はこれを靈的心理学と呼んでいる。相手が隠し事をしている時に靈の存在をほの

めかすとその反応で信心深いかどうかわかるのだ。

「嫌だ。もしかして守護靈かしら。」

「そうかもな。」

「ありがたいわね。逆に。携帯で写メでも撮ろうか?」

「そういう事をすると守護靈は逃げてしまつところよ。」嘘だけだ。

「そうなの。残念ね。」

俺は静香には何か今後悪い事が起るかもしねないと思った。

靈を信じる人間というのは突然いなくなつたり、憑き物に憑依されたりする事が信

じない人間よりも多いといふ話を聞いた事がある。ちょっと心配だ。
さつきの静香の

様子を見た感じでは・・・。

使いっぱしり

健人コーヒー買って来い。若頭の金田が言つ。「はい、わかりました。」

健人は人目につかないようにすぐ近くの自動販売機でブラックコーヒーブラックコーヒーを買った。

組の事務所に戻って金田さんどうぞと差し出すとレザーの五十万はするであろう

ソファに足を組んでタバコを吸っていた金田、いきなり健人に飛び蹴りを喰らわせた。

その後も殴り蹴りこう言つた。「お前曰ついてんのか！俺がいつも普通の缶コーヒーより

ちょっと細長い砂糖の入ったコーヒーが好きだつての知らねえつてのか！」

金田はキヤメルを吸いながら甘い砂糖が舌に絡まつてくるそのティストがいたくお気に入り

だつた。「すんません、すんません。久方ぶりに頼まれた物だから忘れていて。」

「ほんとポンコツだな。お前は。半年前ヤクザに追われてたお前を組に迎え入れてやつたのも

忘れたか?」

すんません・・・。そう言って健人は金田利栄の靴磨きを始めた。
キュキュ、キュキュ。

真新しいタオルとエルメスの靴が擦れ合つ音が小気味良く聞こえて
くる。

「ほお、靴磨きは一級品だな。アイスクリーム屋は危うく殺されか
けたつてのにな」

感謝します。健人はそう言つて靴に息を吹き掛けた。やりたくは
なかつた。ドラッグの売人等。

しかしどうしても金が欲しかつた。あの頃実家の肉屋が潰れかけて
いた。地区再開発とかで大型

ショッピングセンターが出来てから客が全く来なくなつたのだ。そ
んな時だった。悪魔の囁きが

メールに入つたのは。

俺は落ち込んでいた。自分のキャラキャラ加減に嫌気がさした。利用者さんに軽々しく話

し掛けていたら、何かキャラキャラしている学生がいるわねと職員の間で噂になつてゐるそう

なのだ。確かに髪は長いシャトウも入つてゐる。しかし外見だけの問題ではなかつた。指

にはめている指輪に排泄介助している時に便がついたので、必死こいて洗つていたらそれを

職員さんに見咎められそんなに大事なものならつけてくるんじやないよ。私達なんて結婚指

輪も外しているのよ。と言われた。

みんな指輪なんてしてない。迂闊だった。実際に介助したのはその時が始めてで心の準備

が出来ていなかつたと言つたら言い訳になつてしまふな。怪我をさせてしまつので当然外すべきだつたのだ。職員さんに試しにやつてみてと言われた時点でテストが始まつていて、指輪

を外さなかつた俺は〇点という訳だ。心がこもつていないと評価さ

れたようだ。

俺は惇と近藤、元気に相談した。「俺バンド辞めようかな。」と言つたら何言つてるん

だ。俺たち4人一つだろ。一度の失敗で諦めんなよ。お前なら必ず両立出来ると言われた。

だつてお前優しいもん。

俺は不覚にもその言葉で泣いてしまった。俺たちのファンも利用者さんも同じくらい大切なんだ。

どつちも守りたいとその時思つた。とりあえず誠意を見せるため俺は床屋で髪を短く切り揃えた。

静香には「どうしたの？ 失恋でもした？」と笑つて言われたけど、彼女の息子を眺める

ような視線に俺は今にも抱きしめてやりたい衝動に駆られた。事の始終を話した。「そつ

か。譲、でも両手に花じゃない。それだけ可能性があるって事だよ。私は少し羨ましいな。

ほらネイルだつてこの通りまるで手をつけてないしでもその職員さ

んも少しおかしいわよ。

事前に注意すれば良い事なのにテストみたいな事して譲の事まだそんなに知ってるわけでも

ないのにね。」その後譲は譲らしくやればいいよ。人の意見なんて気にしないで持ち前の優

しさがあれば伝わると思うな。と言った。嬉しかった。静香は俺の事を一個の人格として理

解してくれてる。仲間達の声援で俺は立ち直る事が出来た。墜落しそうだったが着陸許可が

出て俺は空母に無事着艦できた、そんな安堵感に包まれていた。

シド様（前書き）

段々話が見えなくなってきたぞ。自分自身でも見えないぞ。（笑）

シド様

健人は考えていた。あのメールさえ来なければと。「お前アイスの売人やつてるだろ。」

差出人は全く知らない人間だった。「どこから仕入れてるかも知ってるぞ。」ならば何故警察に通報しない?

とにかく完全にバレている様だ。健人はメールの返信をした。何処の誰だかわからない人間

だが脅迫まがいのメールだ。相手のことを知らなくてはなるまい。
「お前は誰だ。」「お前

からアイス買つた人間だよ。今は執行猶予期間中なんだ。」「何故メルアドを知つてい

る?」少し返信が遅れた後、「白石系暴力団靈王会・・・」その名前が出た後メールを送つ

てもうんともすんとも言わなくなつた。白石系暴力団靈王会? 聞いた事が無い。しかし

俺がアイスを貰つてているシド様は暴力団員ではない。普段はホームレスをやつてているがただ

の余興の大富豪だ。のはずだ。しかし考えてみれば俺はシド様の家

には言つた事がないし、

金も貰つた事が無い。アイスだつて自分で使つてる様子もないしも
ちろん俺も使つた事がな

い。ただ異世界にトリップ出来る薬だよ、と言わただけだ。その後こう付け加えられた。

その人に合つた世界にねと・・・。

後悔の念（前書き）

この健人と譲の視点1話毎に変わる書き方読みづらさですよね。
なんか珍しい事に挑戦してみよつと思ってやつてるんですけど。

後悔の念

俺は髪を切つてから利用者さんと心を通わす事に一生懸命になれた。
自分が笑顔になれ

ば相手も笑顔になる。そう信じていた。そんな時まるで喋れないほど衰弱しきった女性がい

た。俺は部分入れ歯の交換の介助をした。これは慣れていない者にはまだまだ難しい介助

で、俺は危うく歯を誤飲させる所だった。ゆっくり時間をかける事によつて何とか交換を終えた。

俺に芽生えたお年寄りへの愛情は確かに高まつているように思えた。
その方に他に何かやつ

て欲しい事がありますか？ と聞いた。するとその女性はうな垂れ重い口取りで比較的はつ

きり言つた。「私と代わつて」と。「それは出来ませんよ」無意識の内に俺の脳の判断は人

の苦しみは他人には本当には理解できないという根拠からその言葉を吐いた。

老婆は大人しくなつた。「そうよね」「そうですよ さんなら乗

り越えられます

そんな奇麗事を俺は口走っていた。間違っている・・・。的確な答えが必ずあつたはずなん

だ。一日考えて昨日はああ言いましたけど本当はこう思つていまし
たと云えよ。そう思つ

た。次の日その担当していた利用者さんが亡くなつた事を聞いた。
俺は号泣した。

初めてだつたのだ。実地研修で利用者さんが亡くなつたのは。それ
も自分の担当している

つい昨日心無い言葉で傷つけてしまつたかもしぬない、今日謝罪し
よつと思つていた方が。

俺はこう言おうと思つていた。「代わる事は出来ませんが　さん
はいつも俺の心の中にい

ますよ。」と。気休めかもしれないけど一田癡ぢに考へ出した俺な
りの答えだった。それを

もう伝える事が出来ない。後悔の念が押し寄せてきていた。

デモンズ

白石系暴力団靈王会には実は組長がいない特殊な組織である。3人の「デモンズと呼ばれる

者達の合議で政策が決定されている。金田もその一人だ。健人は金田に一年前に出会った。

何やら新種のドラッグを売つているブッシャーが居ると言つ噂を聞きつけて、そこは靈王会

の縄張りだったのでヤキを入れる為、店に（とは言つてもケータイ裏サイトでの予約制の路

上販売だが）近付いたのだった。

「おい。」アイスを買い求めに来た客と接触している健人に金田は声をかけた。

「ここが靈王会の縄張りだつて知つて商売してんのか。」

客は逃げていった。「これシャブだよなあ。」無言の健人。「ちよつと一袋貸せ。」

金田は「りや何だという顔をして、混ぜ物でもしてんのか、全然効かねえぞ。シャブじや

ねえじやねえか。小麦粉でも売つてんのか。とにかく組に来い。商売してるのは間違いない

からな。そう言つて健人に全治一ヶ月はかかるうかといふくらい暴行を加え、無理矢理組員

に仕立て上げた。「サツに見つかる前に止められて良かつたな。こんな訳のわからん新種の

ドラッグ売つてたら何年ぶちこまれるかわからねえぞ。」そう言つた。健人が白石組系暴力

団靈王会の暴力団員になったその三ヵ月後デモンズの一人が謎の死を遂げ、金田は若頭に昇

進し、そしてデモンズ入りを果たした。何の事はない、健人を殺しかけたのは金田その人で

警察から保護してやつたというのを恩に着せ、今では舎弟みたいな扱いにしているだけなの

だ。これにて健人と、譲と静香は一度と会つことはないような定めになつたようだつた。

静香の靈的？能力（前書き）

書くの遅くて申し訳ございません。

静香の靈的？能力

「靈が見える」 静香がそんな事を言い出したのは卒業間近の一月頃の事だつたろうか。

最初静香は何を言つてゐるのだろう? と思つた。

「時々なんだけど白い鎧を着た男の人や女の人人が見えるの」

「中世の騎士だらうか?」 僕は話を合わせてはいたが、静香は病気になつてしまつたのでは

ないかと疑つていた。 「何か言つてる?」 僕は聞いた。

「分からぬ。 見たことも無いよつた金属製の衣服よ。 最近、 そつ実地研修が終わつてか

ら。「

俺は聞いてみようと思つた。 実地研修で誰か亡くなられた? と。

「ううん、 誰も死んでない。 讓には話してなかつたけど、 私代々巫女の家系なの。 私が生まれてから家族、 親戚中、 ペットすら死んだ事ないの。 私、 死というものに立ち会つた事無いの。」

次に思つたのは憑き物じゃないかという事だ。 現代社会ではもう見られないが、 古代の伝統を受け継ぐ僻地の部族では狐等が取り付くことがある。 日本でもかつてあつた。

「ほり見て！ あの窓！」

え？ と思って振り返ると白い鎧を着た男女と思われる人間に角を付けた様な者達が五十人くらいいるではないか。その方向を見ている学生達は特に気に留めず勉強を続けている。しかしその者達は一メートルくらい浮かんだかと思うとテレビレーションのように消えた。

「静香、俺にも見えたよ。一瞬だつたけど。」

「何のかしら。嫌な予感がする・・・。健人の身に危険が迫っているような。譲、あの神社に行きましょう。それから私の家に来て。」 静香は今にも走り出さんばかりの様子で俺の手を引っ張った。

鉄砲玉

「おい健人鉄砲玉行つて来い」金田は言った。

そして拳銃を渡した。

六発の弾丸と冷たい銃身。それが二十歳そこそこの青年にどれだけの恐怖を与えたか。

ましてや鉄砲玉等……。

「これをやり遂げられたら、お勤め終わり次第空席の若頭にしてやる。どうだ俺はお前の事を誰よりも深く考えているだろ？」「冷たく歪んだ微笑を浮かべながら。

「心配するな。相手は組員十数人の弱小な組だ。ターゲットは城戸組組長の命、何やらシャブでもヘロインでも大麻でもない新種のドラッグで稼いで勢力を拡大しかけてる。おそらくMDMAみたいなもんだろう。少し目障りだ。」

「断つたらどうなるんですか？」健人は聞いた。

金田は深く頷いた後「お前に行く当てがあるのか？ふふふ。ないだろ？ホームレスでもやるか？それならそれでいいぞ。小指は貰つておくがな。」

「・・・わかりました。」

健人は城戸組に向かつた。

親に金を送る為だ、親に金を送る為だ・・・。

もちろん両親は搜索願いを出しているくらいだから、健人から金が送られてきている事については頭の片隅にちらと浮かぶくらいながら。

シリーズとパラ (前書き)

これ完結するのかな?全く構想期間とか無しで書き始めちゃってるから訳わかんないんですけど。

シリースとパレス

神社に着いた。静香はある燈籠をずり下ろして、うか引っこ抜こうと
している。

「静香その下に何があるのか？」

「うん。譲りこれどかしてくれない？」

よいしょ、よいしょ。そんなに重くはないがその燈籠は異様に冷え
ていた。手の平の皮が

持つていかれそうだ。なんとかどかした。その下には四角い穴が掘
られていて箱の様な物が

あつた。

「良かつた。まだあつた。」

「何なんだい？それ。」

スケルオブシリース、静香は難しい英語みたいな名前でその物体を
呼んだ。

「この片割れが私の家にあるの。お婆さんが昔使っていた物なん
だけど。」

何に使うのだろ？巫女といつもから何かの神事だろうか？

「シラレスには千里眼みたいな能力があるの。もう一つはアンセシアコリアって言つんだけ

どその一つを並べて使うと何か不思議な事が起るのじゃ、ってお婆ちゃんが言つてた

わ。でも誰も使った事が無い。だから何が起るかわからない。いやお婆ちゃんが一度使つ

た事があるんだけどその後になくなってしまったの。怖くなつて私達は二つの珠を別々の

所に隠したの。」

静香は回想するように言つた。

「あれは私が原因不明の高熱を出して、医者も訳がわからず日本脳炎かもしれない、いやマ

ラリアか? なんて言つていた時、お婆ちゃんが大丈夫、ワシが治してやるつて言つ

て・・・。コレアには転送能力があるの。人は駄目なんだけど物は送れるの。お婆ちゃんは

その時から行方不明になつて、すぐにパピルスみたいな古代の紙みたいな物に包まれた薬

が私の元に届いて、私は助かつたの。もしかしたらお婆ちゃんはシラレスとコレアを同時に

使つたのかもしれない・・・。「

ちょっとにわかには信じられない話だ。俺は思った。あまりに非科学的だ。静香は俺の手を

引っ張つてまず私の家に行きましょう。実は一度使ってからこの珠は力を失っていたのだけ

ど、今私達の身には何か不思議な事が起こりつつとしている。誰かが動いている。シラレスを

使って健人の居場所が探れるか試してみましょう。静香はそう言つた。

城戸組の事務所

鬱蒼と雑居ビルが生い茂る街の中心部、一階にサラ金、二階に雀荘、三階にマッサージと称

した風俗店が入っているビルの前に健人はいた。このビルの四階に城戸組の事務所がある。

健人はエレベーターの中で誰かと一緒にになれば不安で吐きそうになる事を懸念して、四階まで階段を使った。

安っぽいスニーカーが階段を一段登る度にネチヨネチヨと嫌な音を立てているような気がした。

た。軽い眩目眩で自分が上に行っているのか下に行っているのかわからない、地獄に向かつて

いるのではないか。そんな錯覚を起こさせた。

四階、三つテナントがあるようだったが、中央の一部屋以外は空き室のようだった。その中

央の部屋には何も表示はなかつたが、人の気配とラジエーターの回る音がした。

健人はゴクリと唾を飲み込んでから懐のピストルを確かめドアノブに手をかけた。

「ガチャリ」

鍵は掛かっていなかつた。

健人はドアを開けた。ピストルを片手にしながら。

「白石組系靈王会の愛田健人だ！城戸は何処だ！」

「…」

健人は驚いた。十数人の組員と思われる人々は三十畳はあるだろうか、その畳の上に座布団

を敷いて座りながら寝てる・・・嫌死んでる！

「健人君待つっていたよ。」

その声は顔はシドだった。

シド様一体これは・・・。

「前世のカルマか、今世のカルマか。みんな死んでしまったよ。モンズティアを飲んで

ね。君がくる事はわかつていたから。」

そういうシドの瞳は左目が縁に右目が赤に輝いていた。

「」の子達も連れて行こうと思つていたんだけどやつぱりダメだつ

たみたいだ。」

「健人君、君だけでも連れて行くよ。大丈夫、前言つただろ。この薬を飲めば自分の進む道

が開ける。思い通りにね。」

さあ・・・

健人はシドの瞳に吸い込まれるようにその薬を鼻から吸った。

静香の本に書かれたのは。（前書き）

久々の更新ですが、やっぱ疲れるな。（汗）
間空け過ぎてるから自分で第1話から読まないと
書けないというへたれぶり・・・。

静香の母に告げられたのは。

静香の家に着いた。広い庭は松などが植えられていて日本庭園の雰囲気を醸し出している。

「本堂に行きましょう。」

「あ、お母さん・・・。」静香がそう呼んだ女性は白装束に身を包んだ美しい女性だった。

「コレアが急に光りだしたの。どうしたのかしら。」

「シラレスを使ってみる。健人が何処にいるのか。」

「健人君? 高校の卒業式から行方不明なのよね?」

「ええ・・・。」

静香はシラレスを台座に置きじーっと眺めてあぐらを組んだ。

「譲」につち来て。見える。」

暴力団の事務所のようだ。人がたくさん倒れている。

男がいる。左目が緑で右目が赤の白髪、真っ白だ。上から下まで。目を除いて。

「あ、健人!」少々容貌が変わっているようだが、間違いない健人だった。

二人で何か飲んだかのよう見えたかと思つと同時に「ヒュン」と二人は消えた。

「健人！健人！」 静香が叫ぶ。

静香のお母さんが言つ。 「誰かいるわ。 屋敷内に。 気配を感じる・。・。」

それはあの大学の講堂で見た白い鎧のような物を着て居るこの世界では全くありえない、

前と同じ様に少し空中浮遊している彼、彼女らだった。 性別の区別がよくつかないが。

寄つてきて「邪惡な者達ではなさそうね。 静香、 譲君、 安心しなさい。 私は少し呪術を使え

るし」 そう言つ静香のお母さんにその者達は言った。

静香様はいづれ私たちの王国で王となるお方なのですと。

マサニラ(前書き)

ダメだ。こよこのわけわかめだ・・・。

「う、ここは一体？」

「目覚めたかい、健人君」

「シド様・・・僕は確か」

「いい、思い出さなくても。ここでは必要ない。」

健人の目の前には銀色に輝くキノコ雲があった。
正確には今まで見た事が無い金属で作られていて
中に水の浸つたポッドのような物があった。

周りには草木などが生い茂り美しく、辺りを取り囲む鏡は
近付くと外が透けて見えるようになっている。外は真っ暗だった。

「健人君こひらの世界では大気中の成分が少し違つて直に呼吸が出来なくなる。

あの、マギドPCの中に入つて転生するんだ。」

「マギドPC、転生・・・。」

「分からぬ事だらけだろうけど転生と言つても性別が変わるだけ。
IDタグを作るにはマギドPCによって前居た世界の情報、思考回路を

ちょっと検査して変身しなくてはならないんだ。」

「シド様も女だったのですか？」

「いや、私は違う。まだ知らなくてもいい。」

早く早くと急かすシド様に手を引つ張られて、キノコの形をしたマギドPC

のポッドへの階段を健人は登つていった。

異世界の現状（前書き）

自分で書いていてなるべく覚えやすい横文字で名前を付けているのだがそれでも忘れる。語感があまり良くないようだ。

異世界の現状

「え？何の事？」静香は素つ頓狂な声をあげるしかなかつた。

「貴方達何者？この世の者達ではないようね。」静香の母にはそのもの達の一風変わつた気配が感じ取れるようだ。

俺はただびっくりするだけだつた。静香は女だし、女帝になるつて事？突然すぎてその話の信憑性について思い巡らせる判断能力は失われていた。

その者達は続けた。シドに対抗できるのは貴方達の持つているシリウスとコレアだけだと。

私たちの世界は、今極めて低い文化レベルにあります。それはシドがマギド^{PC}を独占しているからなのです。昔は国は一つには分かれていなかつた。しかしシドが彼は千年は生きているのですが、時折人間に降り立ち、属性というものを持つ人間を連れてきてジルバ、ああこれはシド達が暮らしている方の世界の名前です。ジルバの戦力としているのです。戦争をしているわけではありませんが、属性を持つ人間が多い方が豊かになれるのです。貴方達の世界でも何処か異国の方に工場を建てたりしてコストを削減するでしょう？ああ、私たちの国はマルクと言います。先程言つた様にマギド^{PC}が占拠されているので国交はありません。かつてエルクスという光の道が二つの国を繋いでいたのですが、それは今遮断されているのです。

貴方達には属性があるようです。//一ポッドに入るまではどのような属性かわかりませんが必ず私たちの力になりそ�です。

少し考えて頂いてもしようしければシリウスとコレアの力を解放し

て下さい。私達の国に輸送されるでしょう。その一つの珠にて意志があるのです。

静香も俺もまるでイリオモテヤマネコでも見つけたかのように唖然としていた。静香の母だけが何やら呟きながら思案に耽っていた。その者達は一瞬の内に消えた。

新・マコマード（前書き）

うーん、うーん便秘気味のようだ。中々長く書けない。集中力が続かない。

ポツドの中に入った健人。「なんだろう凄く落ち着く。」シドが呟つ。

「羊水のようなものだ。新たに生まれ變る為に必要な物。フフフ、私の実験の成果。」

キラキラと輝いた後・・・、健人の姿が変わった！漆黒の長い髪、大きな胸、スレンダーな足。ドレスのような物を着ているが、触つてみると鎖帷子のようだ。肩や二の腕、太腿等にもチタンのような防具が付いている。

「予想通りだ。健人君。君の属性は剣士だ。これからはマリアードと名乗るが良い。私の死んだ娘の名だ。」

「はい、シド様。」女の声だが何ら違和感が無い。まるで初めからこの体の中に魂が入っていたのではないかと錯覚するほどだ。

（しかしまさか千分の1程の確率でしか現れない剣士の属性がこの子だったとはな。思つたとおりだ。マリアード待つていろ。今に必ず、フフフ・・・・。）

「シド様、私は何をすれば良いのでしょうか？」

シドは空ろな目で左目の縁と右目の赤がキヨロキヨロし何か考え事のようで声をかけるのが躊躇われたが、「そうだな。まず練兵場に行きなさい。下級種族のゴブリンが沢山いるから好きに斬つて構わない。食べても美味だぞ。」

マリアードは一抹の不安と不気味さをシドに感じながら言われたとおり練兵場に行く事にした。

健人の行方を本格的に追う2人（前書き）

大変疲れています。はい、そんな事は読者にはどうでもいい事な
ですが。

1500人も読んで頂いて嬉しいです。いつかは完結すると思いま
すので。

健人の行方を本格的に追う2人

「お母さん私行つてくる」

「静香・・・」

「私の家の家系の秘密、シリウスとコレア、お祖母ちゃんがいなくなった理由、色々知りたい事がある。この人達について行けばその秘密が解けそうな気がするの。」

「もう戻つて来れないかもしねないわよ。」

「うん・・・私人助けがしたくて今の大大学に入ったの。でも心の奥底では有名になりたい、もつと力が欲しつて心の底で思つてたのね。王様になりたいわけじゃないけど、もつともつと広い世界が見てみたいの。」

騎士風の男が「私たちの国は意外に狭いですけどね。」と言つて隣りの女（だと思われる者）と笑つた。

「譲も来るわよね？シリウスで見たあの風景。男が一人いたけど目の色が緑と赤だったわ。きっと力を持つ者だと思うの。健人たぶんさらわれたんだわ。」

俺は静香の今まで見た事の無い、そう今まで2割くらいしか見てなかつたものが10割見えた様な気がして苦笑いを浮かべたが、「そうだな、男手もまだ必要だろう。」

「・・・」白い鎧を来ている異世界の者達は少しバツの悪そうな顔をして、さあ静香様、と促した。

「わかつてます。」「譲シリウスとコレアに触つて。」

言われるまま触つた。静香は「汝千里を駆ける馬、昇つて消える太

陽、月光の奥ゆかしさの元に我々を導きたまえ。」と囁えた。

縁のシリウスと赤いコレアが輝いたと思つと二人はヒュンと消えた。

よし我々も戻るか。その時静香の母が言つた。「静香をよろしくお願ひします。」

「もちろんです。の方は我々の希望ですから。」「異世界の者達は皆一様に笑顔を浮かべ言つた。

額の封印（前書き）

ちんたらちんたら進んでいきますんで。読む人更新遅えーと思つて
いると思いますが、これでも早い方だ！（開き直る。）

額の封印

私の名はマコアード。シド様を敵対勢力から守るのが勤め。いざれ
は師団長にしてやううと

言われてゐる。練兵場に来て3ヵ月近く経つてゐるらしい。「ゴブリ
ンを千体は切つた。最初

は苦戦したが初期装備の剣が血を吸つことに切れ味を増すので少し
役不足だが練兵場にも飽

きが来ているしもつと強い剣士と戦いたいといつ欲求が出てきた。
私は確か肉が嫌いだつた

よつな記憶があるのだが、思い出さうとする頭が痛くなるが細切
れにしてやつた「ゴブリン

の肉片を見ているとシド様が美味だと言つていた事もあつて、スイ
ッチをカチッと押すと火

が出る道具（これにも確かに名前があつたはずなのだが思い出せない。
思つて出さうとする）額

の菱形を形成している4つの印が痛むのだ。いつからついているの
だろう。（）を使い手近

にあつたゴブリンの服を燃やして火をおこし焼いて食べてみた。特
別美味しいとも感じな

かつたが、後に血生臭い味が襲ってきて吐いてしまった。どうやら肉は受け付けないよう

だ。理由はわからないが。私は練兵場を後にして闘技場に向かった。
ちつ、額が痛む・・・

。私はこんなに好戦的な性格だつただろつか。よく思い出せない。

僅か3カ月でこちらの生

活にも少しばかり慣れた様だ。ここにくる前違つ世界に居たのは微かな記憶でぼんやりと感じる

事はあるのだが、何せ額が痛んでしうがないのではつきりしない。
今はまだ強くなりた

い。そう思つ。

降り立つた場所は（前書き）

異世界物つて書くの楽しいね。名前とか結構テキト - に付けちゃつてもいいし。内容も多少ハチャメチャでもバレない。（笑）

降り立つた場所は

讓と静香は氣を失っていたようだ。体に包帯が巻かれている。近くに2、3人いた。人間のようだが。讓はその者達に聞いた。「ここは何処ですか?」

その者達はここはマルクの辺境ですと答えた。「狭いとか言った割には辺境とかあるんだな。」「そうみたいね」

慌てた様子で、「貴方達はもしや・・・早く大僧正に会わせなくては。」とその人間達は俺達に聞こえるように言つた。

「何慌てるんだろうね。」「讓貴方も少し慌てなさいよ。全然違う世界に来ちゃったのよ。それに見てこれ。」

地面に赤と緑の欠片が散らばっている。「シリウスとコレア割れちゃつた・・・。」

静香はため息をつく。「何とかなるさ。後で使えるかも知れないから全部集めて持つていこう。」2人あたりの地面をくまなく探しおおよそ集めきった。その様子を見ていた人間だろうけど区別する為にヒューマンと呼ぶか、は、相変わらず慌てて「おい、馬車を早く持つて來い。死んでしまうぞ。」「おう。」などと忙しなかつた。

静香が独り言を言つている。「おかしいわね。使つても術者の手元についてくる物じゃないのに。それに割れるなんて。でもこの欠片ホントに使えるかもしない。」と。

俺はどうやら好意的なヒューマンが馬車を持ってくるのを静かに待つていた。がなんか息が苦しい・・・。空気が俺達のいた地と匂い

が違う。静香も「なんだろう。頭痛い。」と言つてこるしどうやら
こつちの世界では大気の成分が違うのではないかといつ結論に達し
た。

5分もしない内に馬車が来て「お一方早く!」と言つてこる。その
声が段々遠くなつて俺と静香は氣絶した。

バトルチュンジ（前書き）

何しろマンガと設定がかぶるのは避けたいが、ゲームのファイアーエンブレムのパクリだ。

バトルチェンジ

闘技場は広く門は閉ざされていた。近くに黒い鎧を着た兵士が2人いる。「新入りか?」そう聞かれ「いや私は異国から来た者だ。右も左も分からぬ。」マリアードはそう言つしかなかつた。「バトルチェンジは出来るのか?」「バトルチェンジ?」

こうだ。両の手の血潮れるヘモン我変化を望む者なり!

光がパバーと辺りに輝いて兵士の姿が変わつた。着物姿で刀を帯に挿している。「これは侍だ。シド様が異国で磨いてきた技術で剣よりも反応が早い。」変身していない兵士が言つた。「お前属性は?」「属性?シド様が言うには剣士だが。」「何?お前がか!」

「我らはウォークローン。この世界で最も普遍的な属性だ。珍しいのは剣士、プリースト、アサシン、ヒーラー、ウォーリア、アーチャー、他にあるが、師団長様達は皆剣士だ。」「そうなのですか。」

「まずバトルチェンジを覚える。二すくみの法則で自分の属性だけでは不利になる。仮属性つまりバトルチェンジが出来なければ闘技場のウオーカーポーン達にも勝てないだろ。」

「わかりました。」とは言つたものの何処へ行けばよいのかマリアードにはわからなかつたが。少しこの国の構造を知りたいと思つとぼとぼと歩き出した。

大僧正

苦しいなあ、苦しいなあ、誰だ俺の首を締めるのは・・・苦しいよ、止めてくれ、目を開けてみると健人？の幻影。夢を見ていたようだ。うわ、唇が・・・俺の顔のすぐ近くには美しい女性の顔があつた。「一体何ですか？」俺が叫ぶと「よしキューア隊、簡易ポッドにすぐ運ぶんだ。」「はい、ケアマネージャー様。」

横を見ると静香が横たわっていて男と唇を重ね合わせていて「ビクツ」となって意識を取り戻した様子だったが、俺はファーストキスを奪われ頭も混乱。簡易ポッドって何？という感じだった。

ストレッチャーらしき物に乗せられて運ばれていく俺。そこには中に水のような物をたたえた

縦型で橿円形の入れ物が5台並んでいて1番左の入れ物にキューアと呼ばれていた2人の男女に肩を抱えられ中に入れられた。

何だか知らないが呼吸が楽になり気持ちが良い。一瞬辺りに光が走った後・・・

え？俺・・・切つた筈の髪が肩のくらいまで伸び、胸はスイカでも巻き付けられた様に重い。これは・・・

2人のキューアが突然恭しくお辞儀をした。「大僧正様。マルクの辺境で見つけた静香様のお連れの方です。」

大僧正と呼ばれた頭が丸刈りのお坊様みたいな背の異常に高い僧侶服を着た男は「ほつほつほ」と笑つた後、「うーんこれは凄い。W属性じゃ。ケアマネージャーに、何とプリーストか。素晴らしい事だ。しかしええ体しどるの一。」鼻の下を伸ばしてそう言つので、

俺は何事かと思い自分の姿を見た。！！！ 体が女になつて。しかも裸だ。俺は慌てふためいてポッドから出て、素っ裸でさつきまで昏睡していた病室のような所に戻つた。すると入れ替わりに静香がストレッチャーらしき物に乗せられてポッドに入る所だった。

塩無しの海

「どうやら私が転生したマギドラシはこの国の最も東にあるらしい。この異世界にどれだけの国があるのかまだわからないが、防衛上の観点からすればあれば中央に位置していなければおかしいと思うのだが。そこにも何か私の知らない秘密があるのでろう。

シド様にしばらく会つてないので謁見する事にした。

「シド様お久しぶりです。」「おお、マリアードか。強くなつたようだな。ゴブリンでは弱すぎたかな。」「いえ、1000体切るのに3ヶ月もかかつてしましました。」「そうか、で今日は何用？」

「はい、闘技場に行きバトルチェンジが出来なければウォーカーボンにも勝てはしないよと門番に言われまして。それにこの国がどういう構造になつていいのかという好奇心もございまして。」「なるほど。この国の一番東にマギドラシがあるのはわかっているか？」

「はい。」「私は基本的にここから動かぬ。隣国のマルクを見るにはここが一番近いからな。」そう言つて大広間の中にたくさんある内の一つの部屋に案内された。「私の目には千里眼の力があるが最近歳のせいがあまりよく見えぬ。故にこの大望遠の置いてある部屋から時折マルクの動向を気にしている。敵対勢力と言うほどの物でもないが、マギドラシの占拠を力もないとせに狙つてゐるようだからな。このブラックハウスの中は自由に移動する事を許可する。しかしマギドラシに続く大門には近付くな。と言つてもあそこの門は第一師団長ギューンが部下と共に厳重に警戒しているがな。」と言つた後、他にもアレを狙つ空中海賊やモンスター同盟等未知ではあるが敵はいるのだがな。バトルチェンジを習得したいなら一番西にある「塩無しの海」でクラ・ケンに認められれば1つか2つ開眼するであろう。遠いからオートバイциклに乗つていきなさい。そう言われた。

轟香はキング見習い（前書き）

聞かせると自分がでもどんな話だったか忘れる。・・。

静香はキング見習い

巫女服姿の静香はポツドに入り液体がキラキラ光る。次の瞬間鎖帷子と鉄製のガードルに身を包んだ少し長い髪の男が現れた。俺はとりあえず現実世界で着ていた服を見つけて着のみ着のままでその静香が男になる瞬間を見ていた。

ゆっくり階段を下りてくる静香。何かもじもじしている。「ねえ譲私どうなっちゃったの？」

「ああ、静香はかなり気が動転しているようだ。『転生したんだよ。男に』」「えー！」静香の細身の体はそのままに戦いに向いているとは思えないが。僕は大僧正に静香の属性を聞いた。大僧正はあごひげを触りながら「キング・・・見習いじゃな。」ずっこける俺。

そう言えばあの白い鎧を着ていた男女も「いすれ」王となると言つていたな。

とりあえず記憶の混乱はないようじゃな。とりあえず言葉使いを直す事から始めて欲しいのう。大僧正が言つ。そんな急には無理だ。20数年俺は男、静香は女をやつってきたのだから。

「善処します。」俺と静香はそういうしかなかつた。「譲君その服では目立つから僧侶服に着替えてもらえないだろうか。」そうか俺はケアマネージャーとプリーストの属性だつたな。この格好では受け入れられないだろう。辺りを歩いている異世界の住人はみな鎧や白衣を着ている。白衣を着ているのは先程俺を連れてきたキューアという属性の者が大半のようだ。鎧を着ている者は剣士の様に見えるが剣をさしていない。「着替えてきますね。」俺はそう言つてこれまで良いのか?と思いつつ女性用の更衣室に恥ずかしながら入つて僧侶服に着替えた。

VSクラーケンー（前書き）

何かこの作品だけで見たような気がする平凡な作品だなあと想つ
が、
 déjà vu のかな？

VSクラーケン1

オートバイクルとはビリビリの乗り物なのだろうと思つていたりビリビリヒューマンの血で走る乗り物のようだ。2リットル血液を失えば死ぬというから、この動力炉に直結している管の太さから出血量を推測して走るしかあるまい。コポコポと溜まつていく血液が500ミリリットル程になつた所で出発する。

軽くふらつぐが・・・何キロメートルくらい走れるだろうと思つていたがこのオートバイクル、カブセル型になつていて速度計は何と200キロを表示している。10分も経たない内に海に出た。つまり私は計算が苦手なのがもしこの地が円をかたどつているとすれば半径20キロメートル程にも満たない広さという事が・・・。帰りの事を考えると手荒な方法でバトルチエングを習得するのはキツイ。

さてどうしたものかと考えていると遙か彼方地平線から何かがこちらに向かってきている。

あの先にも国があるのだろうか等と思案している間に辺りは微かに暗くなつた。

「なんだ?」マリアードが見たものは巨大なイカだ!イカの化け物!
「久々の餌だな。私はクラーケン。腹が減っていた所だ。丁度良い。肉等久しづりよ。」

マリアードは言つた。「ちょっと待つてくれ。私はシド様の命の元にバトルチエングを習得しにきたのだ。」そういうと黒い眼球の中の金色のリングが、がつと開き「シドか。また我的事を試すつもりか。こんな小娘をよこしあつて。」

「何の事だ？」マリアードが聞くとクラーケンは「その剣、血を吸つてかなり強化されているな。バトルチョンジしたければ我の10本ある腕を全て切り落として見せよ。そうして我の吐き出す墨が砂浜に極意を示すであろう。第一師団長のギューンは5分で終わらせたぞ。全く全ての腕が復活するまで1月かかるというのに！」そういつとクラーケンは襲い掛かってきた。「くつ！ 意外に素早いな。」10本も腕があるので。マリアードは一瞬で戦略を立てる必要性に迫られた。

ナインアーヴィング（翻訳者）

アーヴィングのダーマーの神殿とかを想ひ出して頂かねといつへつへる
思ひのですが・・・。

「あの大僧正様、お聞きお聞きしたいのですけど…」讓は何とか女っぽく振る舞おうとしている。実は着替えていた時自分の身体を見て鼻血を出している。

「何かな?」「あのW属性が何とかと仰られていきましたが。」「おお、讓ちゃんは2つの属性を持つて転生したという事じや。」「何か良い事があるのですか?」大僧正は髪をさすりながら別にないのうと言つた。ずっとこける俺、じゃなくて私。「嘘じやよ。ケアマネージャーはキューアの上位属性じや。マギドヤーを占拠されエルクスが断ち切られてから3百年。簡易ポッドで転生して人口の増減、年齢の高齢化を避けていたのだが、簡易ポッドは1人1回しか使えん。それで体力の低下と共に老人が増え出したのじや。それが何を意味するか、分かるかのつ。」私は介護を学んできている。しかし人間の平均寿命は男女平均して80歳くらいだ。もし3百年も生きている生物がいたら年齢と共に減少する物質が必要あるはず。異世界の人間と言つても形作つているのは「水」が半分以上を占めるのは間違いないからだ。

「動けない人が増えてきているという事ですか。」「まあそういう事になる。マルクの人口は減少傾向を示している。忌々しき死とう呪いによつて。」「死が呪いですか?」「そうじや。本来は転生という手段に依つて記憶を紡いできたのじや。そしてこの土地が落ちない理由もちゃんとある。」

「はあ。」私にはこの世界の事はまだまだ理解出来そうもない。「つまり簡素に言うが転生を許されない悪事を働いた者達がいる。その者達のフィリンによつてこの土地は浮いているのじや。」「フィ

リン、浮いている……」「まあ良い。今度話そつ。」

大僧正は「ワシの部屋にセイントが2人いる。重鎮じや。セイントはケアマネージャーとプリーストのW属性を持つ者しかなれぬ。師事して、少し励め。静香殿は私が教育しよう。」

そういうと男の姿の静香に抱きついて「えーん静香君、イイ男になりおつて。女子を泣かすなよ。」そう言つか言つ前か、このスケベ！とビンタが飛んだ。

VSクラーケン2（前書き）

クラーケンは化け物なので手が体の左右に生えているのです。

VSクラーケン2

「マリアードは粘着性のありそうなクラーケンの白い肌に閃いた。「とんとんとん」と体を駆け上がり背中に回ったかと思うと「はつ！」と氣合を入れ一瞬の内に5本の腕を切り落としてしまった。僅か1分にも満たない。「グワー！」と悲鳴をあげたクラーケンは大量の墨を吐き出し砂浜に文字が浮かんだ。読み上げるマリアード。「武器の極意知りたもう者全て我的力を貸されし者。我的黒血と自らの血を混ぜ合わせ飲むが良い。斧使いはウォーリアに、弓使いはスナイパーに、刀使いは侍に、くない使いはアサシンに、剣使いはソードマスターとなるであろう。」と読めた。「頂くぞ。勝負はついただろう。」「く！痛い！痛い！何だその剣。刃がこぼれてボロボロではないか。ギューンの剣は研ぎ澄まされていたぞ。」クラーケンは断面がグチャグチャの腕の傷を残した腕でさすっている。

「仕方ないだろう。休まずこの剣で修行しているのだ。」「

空になつたオートバイクルの動力炉の入れ物を使つて墨を採取し、マリアードは自らの指に傷を付けビンを振つて混ぜ合わせ飲んだ。するとマリアードの持つていた剣がパーンと光つたと思うと鋭く研ぎ澄まされ衣服が黄金の素材に変わつた。それは編み込みで重さを微塵も感じる事が無いどころか羽が生えたように体が軽くなつた。

「これは良い。バトルチエンジ成功だな。しかし剣の魔力が消えたか。まあ良い。剣士に戻れば良いだけの話だからな。」鞘が2つになつて片方の鞘はソードマスター、もう片方の鞘は血まみれで剣士に戻れるようだ。「助かった。クラーケン。こんなに容易いとは思わなかつた。ついでにオートバイクルの燃料にこの墨を使おう。壊れた所でシド様も怒りはしないだろう。」「

ブーンと威勢の良い音を立てて走つていくマリアードの姿が消える

までクラーケンは震えが止まらなかつた。

何の女？（前書き）

セイントが出てきました。譲、静香パートは書きついこので短めです。

何の女?

大僧正の部屋には50代くらいの初老の男性と20代くらいに見える若い女性がいた。この人達がセイントか。

「話は聞いているよ。譲さんと言ったね。類稀なる氣力をお持ちのようだ。」

女のセイントは口を開ざしている。警戒しているようだ。

「あのー俺つていうか私女に転生したんでもうひょっと気恥ずかな感じで、セーフランクに、フランクに。」

女のセイントは「私も昔男だったから関係無い。ただお前のスケベそうな顔が嫌なだけだ。」

「やうですか・・・」

「忠告しておくが、若く見えても私達はお前達の世界の感覚では実際の歳は分からぬし何度も転生しているものは生殖機能が普通と変わってる場合が多いから子供等を作ろうとするな。そういう行為もするな。」

「はあ、肝に銘じておきます。」（今の所美男子とも会っていないし関係無い話だな。）

「せせらぎ」（繪畫）

えーんえーん連載ありすぞー。疲れちゃった。読んで感想くれると
やね』『庄のそだねどな。（イジイジ）

「バトルチーンジ獲得してきたぞ。」

門番は怪訝そうな顔をして「お前がクラーケンを?」と言った。

「思ったより容易かつた、さあ中に入れてくれ」

門番はひそひそ2人で話しながら女の出場者は滅多に居ない0の付く日が大会の開催日だから今はこの予約帳に名前を書いて置いてくれ

といつ趣の事を言った。

「マニアード」やう記入してとりあえず闘技場を去った。

シド様の所に行くか・・・。

「シド様。」

「ん、マニアードか。」シドはまたマルクの方角の見える望遠鏡のある高台にいた。

「シド様こには冷えます。

玉座にお座りになり部下にそのような雑事は任せた方が良いかと。」

「はつはつは、かりそめの王の座など興味は無いわ。それに人があまりいない。ふむ、墨の匂いが染み付いている。クラーケンを倒してきたか。ゆっくり風呂にでも入りなさい。女は身だしなみに気をつけなくなくてはな。」

その背中は少し寂しそうだった。

バスタブに浸かり体を洗っているうちに額の痣がキュンキュンと痛んだ。「シド様のお姿を見かけ思いを巡らせるといつも痛むな。一体いつから付いたのやら。」

タオルで体を拭き新しく手に入れた剣の方を引き抜く。シルバーで軽量の鎖帷子に黄色い鉄を編み込んだスカート、金属のブーツ。

ふん、この薄汚い剣を使っていた時とはまるで違うな。しかし魔力というよりも科学の力か・・・私にはゴブリンの相手の方がしつくりくるが。

まあこまめに使い分け魔力も科学力も鍛えるか。

髪を拭いたマリアードは天蓋付きの柔らかそうなベッドを無視してソファに寝転んだ。

冷血の風穴（前書き）

どうもすこません。遅い上に短くて。ホント自分の才能の無さが嫌になる今日この頃です・・・。

冷血の風穴

セイントになる為にはキュア（治療）、破魔調律（呪文）、ケアマネジメント（読心術）が必要となるわ。とりあえずマルクの東の果てに「冷血の風穴」と呼ばれる洞窟があるので。

そこにはモンスターが居るのだけどその洞窟を開いた風穴を埋めないと酸素が大量に入つて来て私たちは害となるのよ。

譲はそこに行つてキュアをやってもらいたいの。キューア10人つけるわ。見ているうちに力が開花すると思うから。何しろ人口が1000人程の国だから精銳の30人しか送り込んでないのよね。ドロップというモンスターで鋭い牙と爪を持っていて毒が仕込んであるから。

貴方は戦わなくていいわ。破魔調律を覚えないと戦闘は無理だから。もし話せないほど傷ついた者がいたらその者の胸に手を当ててじらんなさい。このクリスタルを渡すわ。それでケアマネジメントが出来るはず。

いきなり実戦だけど貴方ならキュアとケアマネジメントの要領はすぐ掴めると思う。W属性だし。破魔調律は退魔結界を張つて1カ月訓練しましょう。

「はあ。」色々言われて少し混乱する譲だった。

「私モリスト。女、男、女と転生してるわ。だから若く見えるの。」
「ちひはジョージよ。」

うーんますます混乱する譲なのでした。

私は夢を見ない（前書き）

間空けちやうと読者数も減るし、自分で「何書いたっけ？」って作品読み直してるんだから世話無いしwww

私は夢を見ない

私は夢を見ない。かつて見た事があつたような気もする。寝てる間は退屈する事も無いし、無理に夢など見る必要も無い。しかし分からないのは私の両親だ。どうでもいいと言えばどうでもいい。ただひどくお世話になつた様な気がして夢で会えたならあなたと時折思うが、私にはシド様という絶対的な君主がいるわけで、そしてまるで父親のようにお慕い申し上げている。

ただこの記憶障害はシド様に出会つてから。それも急にだ。その点に関して少々疑いを持つているのも事実ではある。私が記憶を取り戻したらどうなるのだろう？ 気が狂うのだろうか？

それとも暖かい団欒でもあつたのかしらね。今となつては本当にどうでも良い事だけど。

私はまだ一兵卒に過ぎないのでから。力をつけてシド様の大願を成就させたい。危険かもしれない・・・ふとよぎる。私はシド様の事を殆ど知らない。しかし・・・そこで思考が途切れた。代わりに今日が〇のつく日である事を思い出す。

鎧兜では少々心許無い。防具屋で甲冑を買つか。動きは鈍るが私は死ぬ訳にはいかない。

大会ルールでは相手を殺してはならないという規定があるにはあるが万が一という事もあるしな。

ああ、気付いたら下着姿で寝ていたようだ。この癖も何だかフラッシュバックする体験のような氣もするが氣のせいだろう。

しかし一応女なのにはしたない。私はシャツに青色の所々穴の開い

た（これは何とこいつお前であったか、ええい！）服を着て出かけた。

任務遂行（前書き）

破魔調律が使えるのは何時になるんでしょうね？

任務遂行

譲は足の速い馬に引かせた馬車に乗つて冷血の風穴に向かつた。「ここですか。」「譲様、私達はあくまで運転のプロ、戦闘には参加できません。ここからはお一人で。」「わかったよ。」その洞窟は一步踏み入れるとひんやりし、三歩歩くと心臓が凍りつきそうに寒い。遠くから人の叫び声、怪物の咆哮のような物が聞こえ落ち着かない。更に奥に進む。そこにドブロブだと思われる怪物が十体ほどいるようだ。ひのきの棒でドブロブを何度も何度もぶつ叩いている戦闘部隊と倒れたキューア達がいた。

一人ドブロブに噛み付かれたものがいるようだ。喋る事も出来ない。譲は早速モリスの言ったとおり胸に手を当ててみた。するとどうだろ？瀕死の男の心の声が聞こえる。

「つ、苦しいし手足が痺れる。俺はこんな所で死ぬのか？」

非常に危険な状態だと譲は認識した。大声で誰か解毒剤持つていませんか？と叫んだ。

「ほらよ。」ドブロブと戦っていた戦闘部隊の一人がドブロブに背中を向け危険も顧みず解毒剤をくれた。「注射は医療行為だから専門外なんだけどなー」とゴチながら血管を探る譲。

注射してしばらぐするとその男は「いてて・・・」と咳きながら立ち上がった。

「あれ、譲様貴方が助けてくださったんですか？」「いや・・・俺は注射しただけ。

礼はある大柄の男に言つてくれ。」「ああ、リーダーですか？流石傷一つ負っていない。」「

その男はドブロブを五体も倒し冷血の風穴を塞いだ。

「おお寒い」謙は聞いた。「貴方がリーダーなのですか?」「まあリーダーと言えばリーダーだがBグループだからな。ドブロブは毒が怖いだけでそんなに強くないし。」

「あ、僕ケアマネジメント出来ました。」「ほつ、お前が異世界から来た救世主か。ええ乳しどるな。」お前は大僧正か!心の中で呟いた。

「今度訓練してやる。まあ俺よりジョージの方が強いがな。まあ帰るぞ。」

何とか任務を遂行した譲だった。

ペリス（前書き）

ペリスとはジルバの基軸通貨です。

「どうぞうシド様から「この世界の通貨だ。10万ペリスある。好きに使うといい。」

と言われたのだった。防具屋で品定めを始める。「なあこの店で一番丈夫な甲冑が欲しいのだが。10万ペリスで買えるかね?」

防具屋のオジサンとオバサンは同時に「なんですよー貴方は何処かの貴族か?」と驚く。

何の事だろ??

オジサンとオバサンはこの店で一番高い黄金の甲冑でも2千ペリスですよと言った。

クロスと呼ばれて魔力を反射すると聞い伝えがある聖衣です。

「シド様つてお金持ちなのね・・・。一体何で稼いだのやら。じゃあそれ頂戴。」

「分かりました。でもかなり重量がありますよ。試着していきますか?」

「まあそうだな。いくら防御力が高くとも動けないのでは仕方が無い。どれどれ」奥の試着室で暖かい素材のインナーとパンツの上から甲冑を身に着けた。すると・・・「うー重い。」マリアードはその場にしゃがみ込んだ。

「どうでござりますか?」オジサンは聞く。「凄い重さだな。男物か。」「まあそうでゲスが、貴方の体の左側に挿してある剣、かなり血を吸つて魔力を蓄えているようだ。疾風丸という薬があります。それを飲むと魔力に反応して鎧が軽くなると思つてゲス。」

「ゲス、ゲス……」五月蠅い親父だ。まるで私が下賤の者のような気がしてくる。

「その疾風丸というのは?」「はい、近くの道具屋に売つてゐると思うでゲス。一粒百ペリスくらいでしうつかね。」「そいつか……時間が無いが寄つて見る事にするか。

しかしこの防具屋凄くボロいが信用出来るのかね。マリアードは少し不安を覚えながら書いてもらつた地図を見て道具屋に向かつた。

一時帰還（前書き）

梅昆布茶が

何で出てきたかつて？

今飲んだら美味しかつたからさー。

一時帰還

謙達は都に帰ってきた。セイントのジョージとモ里斯が管理責任者となつているピコルームに行きケアマネジメントに成功した事を報告する。

「ふーん、あのクリスタルさえあれば誰でも出来るからね。」とモリス。

「しかしピーターからの報告によるとデブロブの毒液を中和する薬剤を注射したそうじやないか。」

「ピーターさんて誰ですか？」と謙は聞く。

「ああ、君に解毒剤を渡した男だよ。肉断骨決の勇といつづ名を持つている。」

「へー。」

「まあ、君はあちらの世界で医学を学んでいたらしくから別に不思議はないがキューアとなる者は基本3本指なので注射は苦手なのですよ。」

「え、みんな手袋してるから気付かなかつた・・・。」

「彼らもコンプレックスなんだ。治癒を行う時にバーストライアングルという一種の印だね。それを作る為にキューアは基本的に3本指なんだ。昇格する時に指を2本移植する。」

「うーん、何か気持ち悪くなつてきた。」

「はつはつは。まあ君達の居た世界とは少し勝手が違うかもしけないな。」

そう言ってジョージは梅昆布茶（大好きらしい）を啜り、モ里斯はブラックコーヒーを必死にふーふーしながら飲んでいた。

（何か人間らしいな・・・）梅昆布茶を美味そうに飲むジョージと猫舌のモリス、他の人々もみんな優しかった。

譲が着々と成長している間に静香はマルクの王、フラウ・アリス・ザックハルトに謁見していた。大僧正と共に。なんとマルクの王は現在女性が務め上げているのだ。

普段騒がしい大僧正も口をつぐみ恭しく膝まづき、静香も精一杯の礼を尽くす様に、右手を軽く左わき腹の辺りに留め置き礼をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1673m/>

テイルズオブサイレンス

2011年12月20日17時50分発行